「みんなでつくる循環プロジェクト」

事　業　計　画　書

2026年11月10日 作成

作成チーム名：キクロス

事業名	「みんなでつくる循環プロジェクト」
事業理念	日常の中に防災を、廃棄される資源に新たな価値を。日々の暮らしが「もしも」の支えになる社会をつくる。
事業の概要	「防災」×「資源循環」をテーマに、不要な衣類から作製した布ぞうりに防災視点を融合させた「防災用布ぞうり」の開発および普及を行う。防災用布ぞうりは、地震発生直後に散乱物から足裏を守る備えとなるほか、手軽にお手入れができて衛生的に長く使える実用性を備えている。本事業では、不要な衣類を用いた製法技術に加え、平時はルームシューズ、非常時は防災グッズとして役立つ「フェーズフリー」な活用法を普及する体験型ワークショップを開催(10月に一般向け、11月に学童向けを開催)し、参加者が製作を通じて身近な素材で身を守る知恵を学び、防災や環境配慮を自分ごと化する機会を創出する。12 月のトレードフェアでは、完成した製品の展示とともに、ワークショップの実施状況や参加者の防災意識の変容に関する分析結果を発表する予定である。

(1)提案事業の社会的背景と動機　*信頼性のある団体が提供する数値データなどに基づいて提示する

近年の社会課題は、以前よりもはるかに私たちの生活の中で目に見える形で露呈している。「地震大国」と呼ばれ、北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートの4つのプレートがせめぎ合う日本では、地震が頻発することに慣れ対策を怠ってはならない。実際、2011年から2020年までの間、マグニチュード6.0以上の地震の17.9%が日本周辺で発生している(一般財団法人国立技術研究センター,『地震の多い国、日本』, https://www.jice.or.jp/knowledge/japan/commentary12)。近年も各地で大規模な地震が発生しており、私たちは、日頃から地震に対する意識を高め、いつ起こるか分からない災害に備えながら生活することが求められる。さらに、環境負荷の増大は、地球温暖化をはじめとする様々な環境問題につながっている。環境省によれば、衣類の「大量生産・大量消費・大量廃棄」によって、製造時の資源やエネルギー使用の増加、ライフサイクルの短命化等が生じ、環境負荷が大きいと指摘されている(環境省,『衣類・ファッションの資源循環』, https://www.env.go.jp/recycle/recycling/fashion/page_00113.html)。近年では、家庭から廃棄される衣類の削減や、衣類を長く使用し、リユース・リサイクルによって循環させることの重要性も高まっている。特に「大量廃棄」は、私たち一人ひとりの意識や行動によって、廃棄される衣類をリサイクルへとつなげることができる。不要となった衣類を単に廃棄するのではなく、自分たちの手で新たな価値を持つものへと生まれ変わらせることで、資源循環を促し、環境課題の解決につなげられないだろうか。
そこで私たちは、日本を取り巻く社会課題である「地震への備え」と「環境負荷の低減」を別々の問題として捉えるのではなく、両者を一つの事業によって同時に解決できないかと考えた。一見すると関連性のないように見える「防災」と「資源循環」を、不要となった衣類を活用した「防災用布ぞうり」の製作によって結び付ける。不要な衣類を新たな形で活用することで、資源循環を促すだけでなく、「災害時にも役立つものを自らの手で作る」という体験を通して、日常生活の中で防災を意識するきっかけを生み出すことを目指す。これら二つの社会課題を掛け合わせ、単なるアップサイクルや防災啓発にとどまらない、新たな価値の創出につながると考え、本事業を提案するに至った。
参考資料:国立科学博物館,『日本で起こる地震』, https://www.kahaku.go.jp/pickup-science/nid00000982.html

(2)誰を対象とした事業か（ターゲット顧客）　*なぜこの人達を対象とするのかわかるように記述する

本プロジェクトの主な対象は、これからの未来を担う小学生を対象としているが、一般成人層・地域コミュニティなど広く設定している。災害への備えや環境保護の重要性は広く認識されている一方で、家庭でそれらについて話し合ったり、具体的な行動に移したりする機会は限られている。また、近年では気候変動等に伴う自然災害の激甚化・頻発化により、日頃から防災や環境について考え、行動する必要性が高まっている。そこで、過去の災害や環境配慮の大切さを次世代へ継承するだけでなく、過去の災害の記憶を忘れず、日ごろから防災や環境について考え、行動するきっかけを提供することを目指す。具体的には、座学にとどまらず、手を動かす体験型のワークショップを実施し、楽しみながら防災や環境への関心を高める。また、完成品を家庭に持ち帰ることで、ワークショップで得た学びを家庭内で共有し、日常の備えや環境に配慮した行動につなげることを狙いとしている。

(3) 事業で提供する具体的な製品・サービスについて　*試作品のイメージ図などは別途添付資料としてつける

本事業では、本来廃棄される衣類を再利用した「防災用布ぞうり」の製作と、それを通じて資源循環や防災について考える体験型ワークショップを提供する。参加者が不要になった衣類を材料として布ぞうりを製作することで、廃棄されるものに新たな価値を与え、資源循環を身近に感じるきっかけをつくる。また、布ぞうりを単なるリメイク品として終わらせるのではなく、災害時にも活用できるものとして提案する点を本事業の特徴とする。
ワークショップでは、布ぞうりの製作だけでなく、災害について身近な人と話し合うことの重要性や、日常生活の中でできる災害への備えについて伝える時間を設ける。これにより、「作って終わり」ではなく、楽しみながら資源循環と防災の双方について考えられる場を提供する。参加対象者の年齢に合わせ、製作工程の一部を事前に準備するなど、場合によって難易度や所要時間を調整する。普段着ていた衣類が、非常時には自分を支えるものへと姿を変える体験を通して、「日常の中に防災を」という考え方を広めていく。



(4)事業の必要性・市場性・成長性　　＊信頼性のあるデータに基づいた提案をすること

本事業は、「防災」と「資源循環」の二つに焦点を当てた事業であるため、事業の必要性等も二つそれぞれの観点から提案する。

★防災 について

【必要性】

内閣府が令和7年8月に調査した「防災に関する世論調査」によると、ここ1～2年ほどの間に、一度でも家族や身近な人と自然災害の発生時にどう対処するか話し合ったことがないと答えた人が35.1%、また話し合ったことがない理由として、「話し合うきっかけがなかったから」を上げた者の割合が56.7%と最も高いことがわかる(内閣府,『防災に関する世論調査』, https://survey.gov-online.go.jp/public_safety/202510/r07/r07-bousai/)。先述の通り、近年も能登半島や熊本県などで大きな災害が発生しているのにもかかわらず、きっかけの無さや緊急時でも身近な人とすぐ連絡が取れると思い、話し合う機会すら生まれていないことが現実として存在する。私たちは、この事業を通して「災害を周りの人と話すきっかけ」を提供することそのものに存在意義があり、事業の必要性が高いと考えている。

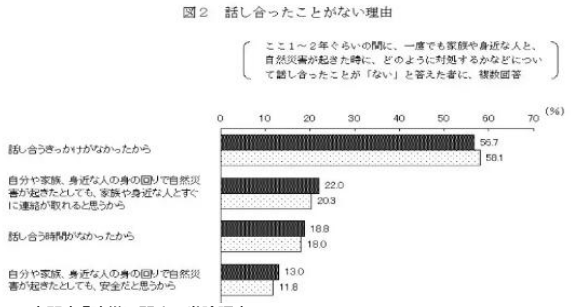

図1:内閣府,『防災に関する世論調査』, https://survey.gov-online.go.jp/public_safety/202510/r07/r07-bousai/ 図から抜粋

【市場性・成長性】

「防災用布ぞうり」を平時、非常時問わず履くことで「フェーズフリー」な防災用品としての確立を目指す。そもそもフェーズフリーとは、「身のまわりにあるモノやサービスを、日常時はもちろん、非常時にも役立つようにデザインしようという考え方」(一般社団法人フェーズフリー協会,『「日常時」と「非常時」という2つのフェーズをフリーにする『フェーズフリー』な社会の実現を目指して』, https://phasefree.or.jp/phasefree.html)であり、非常時に取り出して使うのではなく、日常生活での利用に＋αとして非常時にも役立つといった立ち位置である。実際2025年に実施された調査では、フェーズフリー市場は2026年度の予測値で前年度の149.2%と、右肩上がりが予測されている(株式会社矢野経済研究所,『フェーズフリー市場に関する調査を実施(2025年)』, https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3867?srsltid=AfmBOoqtXthCS7mATpLwvcrliAZCtmoGf7DTzhkyAQr5KGXqzooWBF9Q (※1))。また、フェーズフリーの「日常に自然に備えを組み込む」といった価値観は、幅広い生活者にとって理解しやすく共感が得やすいことから、今後の都市政策や公共整備における新たな標準になりつつある(※1)とされている。このような市場性、成長性も踏まえ、私たちは負担を掛けずに楽しく対策する事をモットーに、本事業を提案する。

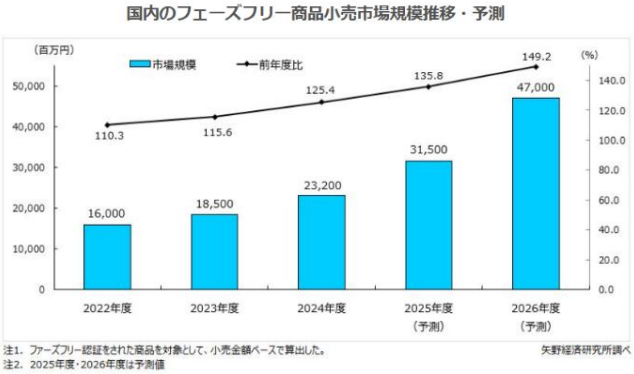

図 2:株式会社矢野経済研究所,『フェーズフリー市場に関する調査を実施(2025年)』, https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3867?srsltid=AfmBOoqtXthCS7mATpLwvcrliAZCtmoGf7DTzhkyAQr5KGXqzooWBF9Q

★資源循環 について

【必要性】

アパレルファッション産業は製造過程における環境負荷が非常に大きく、持続可能な社会を発展させるうえでは課題や懸念点が数多く存在する。私たちは、消費者の「買う・着る・捨てるまたは売る」といった衣類のサイクルの中で、「処分」(捨てるまたは売る)が最も身近で貢献しやすいと考え、本事業で焦点を当てることにした。環境省によれば、日本の家庭から焼却・埋め立てされる衣類の量は年間約50万トン、これは1年間に供給される新品衣類の約6割に相当する量とされている(環境省,『SUSTAINABLE FASHION』, https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/ (※2))。また、1年間に1回も着られていない服が一人当たり約24着もある事から、家庭にしまい込まれている服の活用性も課題とされている(※2)。このことから、「着てない服」をアップサイクルし処分する資源を少しでも減らす努力が必要であると感じた。私たちの事業で取り扱う「防災用布ぞうり」は、自分自身の不要な衣類を利用する。この衣類には、買ったけどサイズが合わなかったから捨てる予定の衣類、思い出の品でもう着られないけど捨てられない衣類、一目ぼれして買ったけど結局着なかった衣類など、消費者の様々なニーズに対応してアップサイクルすることができる。着られていない洋服を「捨てる・売る」のではなく、自らの手で再利用する方法を、ワークショップやトレードフェアを通じて普及していく必要性があると考えている。



図 3:環境省,『SUSTAINABLE FASHION』, https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/

【市場性・成長性】

近年、「サーキュラーエコノミー(CE、循環経済)」(＝資源を効率的に循環させて持続可能な社会を構築しながら、同時に経済成長

を実現する新しい経済システム(MRI三菱総合研究所,「サーキュラーエコノミーとは？ 注目される背景や実現方法を解説」, https://www.mri.co.jp/knowledge/column/ss_circular-economy.html)(※3))が注目されている。特徴として、あらゆる段階で資源の効率的・循環的な利用を図りつつ、製品やサービスの付加価値を高めていく点が挙げられる(※3)。私たちが行う「防災用布ぞうり」では、効率的な資源循環によって付加価値を高めていく工程を、ワークショップを通じて体験でき、資源の新たな利用方法の普及にもつながる。日本政府が試算したサーキュラーエコノミーの国内市場規模は、2020年で50兆円、2030年で80兆円、2050年には120兆円と拡大する見込みであり、世界規模で見ても2030年に4.5兆ドル、2050年には25兆ドルもの市場規模と試算されている(経済産業省 資源エネルギー庁,「成長志向の資源循環経済システム「サーキュラーエコノミー」(前編)どんな課題を解決するの？」, https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/circular_economy_01.html)。これを見ても資源循環、とくにサーキュラーエコノミーの市場は拡大傾向であり、本事業を行う上で成長性が見込めると考えている。

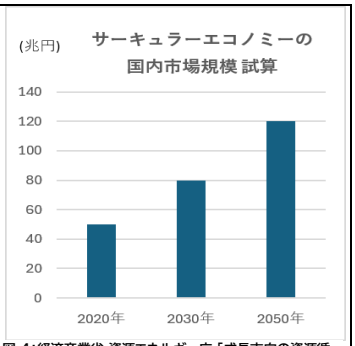

図 4:経済産業省 資源エネルギー庁,「成長志向の資源循環経済システム「サーキュラーエコノミー」(前編)どんな課題を解決するの？」, https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/circular_economy_01.html グラフから作成

(5)競合状況分析（他者の状況、自社の優れた点、競争力） ＊SWOT 分析などを活用して分析する

自社について

キクロスの特徴は、「捨てられるものを再利用する」という環境面の価値と、「災害に備える」という防災面の価値を、一つの製品・体験に組み込む点にある。特に、普段自分たちが着ていた衣類を使用することで、資源循環を自分自身の生活と結び付けて考えられる。また、完成した防災用布ぞうりを持ち帰ることで、ワークショップで得た学びがその場限りにならず、家庭で防災について話すきっかけになることも期待できる。さらに、布ぞうりの製作方法や背景について実務家から学んだ知識を取り入れながら、キクロス独自の「防災」という視点を加える。既存の活動をそのまま再現するのではなく、資源を循環させながら、人々の防災意識も次へつないでいく点を本事業の競争力とする。

他社について

衣類などの不要品を再利用して新しい製品を生み出すアップサイクルの取り組みや、子どもを対象とした防災教育・防災ワークショップは既に様々な形で実施されている。また、布ぞうりについても、不要になった衣類を活用した製作体験や、日本の生活文化を伝えるワークショップが存在する。

一方で、これらは「資源循環」「防災」「布ぞうり製作」がそれぞれ独立した活動として行われることが多いと考えられる。そのため、不要衣類の再利用から防災への備えまでを一つの体験の中で結び付けることに、本事業の差別化の余地がある。

(6)販売方法 *4P4C などのフレームワークを使って明確化していくこと

販　路

本事業では、完成した布ぞうりそのものの販売を中心とするのではなく、「防災用布ぞうりを作る体験」をサービスとして提供する。主な提供方法として、レンタルスペースや貸会議室等を利用した少人数制のワークショップを実施する。

参加者には実際に防災用布ぞうりを製作してもらい、完成品を持ち帰ってもらう。また、12月に参加予定のユースエンタープライズのトレードフェアでは、実際に製作した防災用布ぞうりを展示し、キクロスの活動や資源循環、防災について来場者に発信する。

集客については、キクロスのInstagramやウェブサイトを活用し、ワークショップの開催情報だけでなく、製作過程や活動内容、資源循環・防災に関する情報を継続的に発信。

価格設定

ワークショップの参加価格については、利益の最大化ではなく、参加しやすさと事業を継続できる価格の両立を重視する。そのため、10月開催の一般向けワークショップでは￥3,000、11月の学童向けワークショップでは無料で開催する。

材料には不要となった衣類を積極的に活用することで、新品の布を購入する場合と比較して材料費を抑える。低価格で参加できる仕組みを目指すことで、子どもや学生を含め、幅広い人が体験可能なサービスの価格設定にする。

(7)広報・営業戦略 *4P4C などのフレームワークを使って明確化していくこと

広報・販売促進手段	営業方法
本プロジェクトをより多くの人に知ってもらい、ワークショップへの参加につなげるため、専用のInstagramアカウントを開設し、ワークショップの開催情報や活動内容を発信していく予定である。また、布ぞうりは使い古したTシャツを材料として活用できるため、特別な材料を用意する必要がなく、身近なものから手軽に取り組める点を魅力として発信する。	本プロジェクトでは、布ぞうりそのものの販売ではなく、製作を通じて防災や環境について考えるワークショップを提供する予定である。さらに、活動に協賛してくださっている実務家の方にもご協力いただき、ボランティアとしてワークショップの運営や指導に携わっていただく予定である。

(8)その他事業運営において予想される問題点とその解決策

問題点	解決策
①ワークショップの開催にあたり、参加者一人ひとりに丁寧な指導を行うため、一度に受け入れられる参加人数が限られてしまうことが懸念される。 ②ワークショップに参加できない人。	①参加希望者が多い場合には、開催回数を増やすことで対応していく。 ②Instagram等で活動内容や防災・環境保護の重要性を発信することで、より多くの人に本プロジェクトの目的を知ってもらうことを目指す。 さらに、協働してくださっている実務家の方が定期的に布ぞうりのワークショップを開催しているため、こうした既存の開催機会も活用することで、参加者が体験できる場を確保する。

(9)事業スケジュール

時期	取り組む内容
7/15	外部関係者へのアポイントメント・チーム内でのプロジェクト概要を決定
8/29	第1回MT(先方含む)@学習院大学
9/19	第2回MT(先方含む)@横浜市
10/13	学童へご挨拶、MT(同ゼミ「パタ学！」との共同開催が決定)
10/17	第3回MT(先方含む)@横浜市
10/18	一般向けワークショップ開催@東池袋
11/30	学童向けワークショップ開催@子供スキップ目白
12/6	トレードフェア@名古屋

(10)資源のチェック項目

	必要条件	有	無	獲得方法
人　材	ワークショップ ファシリテーター	○		チームメンバー
	ワークショップ参加者(5名ほどを予定)	○		インスタで募集予定
	ワークショップ協力者	○		市ノ瀬絵里子さん
モ　ノ	不要な衣類	○		参加者が持参
	防災用布ぞうり作製に必要な備品	○		チームメンバーによる調達、市ノ瀬さんにご相談
資　金	ワークショップ用備品購入代	○		
	ワークショップ開催費用(会場費用＋鼻緒代)	○		ワークショップ参加者から￥3,000/人。 11月学童ワークショップ→会場費0。
	トレードフェア用備品購入代	○		
情報(専門知識・技術など)	防災用布ぞうりの作り方	○		市ノ瀬さん→チームメンバー全員がワークショップ参加者に作成方法を伝授できるようにする。
	布ぞうりの歴史背景	○		市ノ瀬絵里子さん
販売方法(仕入先などの販路)	不要な衣類	○		参加者が持参
	販売については現段階では考えておらず、ワークショップ参加者自身が作成した防災用布ぞうりを持ち帰り、身近な人と「防災」「資源循環」について考える「きっかけ」を提供できればと考えている。			

(11)資金計画

1.経費（必要なお金）

No.	項目		金額
1	ワークショップ会場代(@東池袋)		￥6,237
2	ワークショップ 備品不足分	百均 ピンセット*1	￥110
3		百均 クランプ*12	￥1,320
4		ホームセンター ロープ6mm	￥525
5	市ノ瀬絵里子様	MT会場代 4時間で￥1,000の会場を2回使用	￥1,000*2回＝￥2,000
6		鼻緒セット代	￥1,000*6＝￥6,000
7	ワークショップ当日交通費 メンバー	今野 ￥178、大塚 ￥178、中野 ￥488	￥844
8			
9			
10			
11			
12			
合計			**￥17,036**
⇒よって、経費全てをカバーするワークショップ参加費は、**￥2,839.333/人以上**にする必要がある。			

2.収入（経費を補うために得るお金）

No.	項目	金額
1	ワークショップ参加代金/人	￥3,000*6=**￥18,000**
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
合計		
利益(収入から経費を引いて手元に残るお金)		**￥964**
⇒よって、￥160.6666/人の利益が見込める。		